

薬事医療業界ニュース

トピックス

イベント・講演

検査値などを薬局に開示-中国四国地域の各病院が報告 第53回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会中国四国支部学術大会

2014年11月14日(金)

■ネットや院外処方箋を活用-中国支部学術大会から

インターネットを介した地域医療連携システムや院外処方箋を活用して、検査値などの情報を薬局薬剤師に提供する病院が増えつつある。8、9日に広島市で開かれた第53回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会中国四国支部学術大会でも、同地域の複数の病院が、様々な手段で薬局への情報提供に力を入れていることを報告した。実際に薬局薬剤師が、病名や検査値などの情報を処方鑑査や服薬指導に活用した事例が出てきており、今後は全薬局への浸透が課題になることが示された。

国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター薬剤科の小川喜通氏は、地域医療連携システム「波と風ネット」を利用した薬局への情報提供について概要を紹介した。

波と風ネットは病診連携を目的に構築されたシステム。このネットワークに参加する地域の病院や診療所の医師は、安全なインターネット回線を通じて、同センターの電子カルテ情報を閲覧できる。2010年から本格的な運用が始まり、地域の薬局薬剤師の参加も認められた。

参加薬局はICカード機能付きのUSBをパソコンに挿入して、ネットワークに入る。患者が情報開示に同意した対象施設の医師は、電子カルテ情報を全て閲覧できる。薬局薬剤師は電子カルテ情報のうち患者プロフィール、病名、薬歴、検査結果を閲覧可能だ。1カ月の利用料は4000円かかる。

小川氏は、利用している薬局薬剤師から、▽病名や既往歴を事前に分かった上で患者の背景に沿った薬剤指導を行える▽病名や治療に沿った説明を行える▽検査値を把握して投与量などをチェックできる——などの声があることを紹介した。

その一方で小川氏は「薬局への普及がまだ進んでいない」と課題を語った。当初は2薬局のみが参加。その後、外来がん患者の薬薬連携推進を目的とした定期的な研修会の開催を通じて、参加薬局は12薬局に増えた。しかし、門前薬局はなく、院外処方箋は面に拡散しているにもかかわらず、参加薬局はまだ呉市薬剤師会所属薬局数の約1割にとどまっているという。

小川氏は「病院薬剤師の記録を閲覧できるようになれば、参加を考えたという薬局は多い」と述べ、その実現に向けて「院内で調整を進めている」と話した。

高知医療センター薬局の岸之上貴代氏は、Web型電子カルテ閲覧サービス「くじらネット」を介した情報提供について紹介した。

くじらネットは、インターネットを利用して、同センターの電子カルテ情報を開示するもの。高知県内連携医療機関の医師を対象に12年から運用を開始した。利用対象施設を薬局に拡大すべく現在、モデル事業を実施している。

薬局薬剤師は、高知県薬剤師会を通じて同センターに利用申請を行い、IDやパスワードを取得。服薬指導時に患者から同意を取得し同センターに連絡すると、該当患者の電子カルテを閲覧できる。電子カルテ情報のうち、処方歴、注射歴、検査結果、診療録、プロフィール、病名、経過表、サマリ、患者メモを閲覧可能だ。

今年9月から4薬局、十数人の患者を対象に試行を開始した。運用時の課題を抽出した上で、15年から高知県薬剤師会全体での本格的な運用を開始する計画だ。

岸之上氏は「電子カルテを参照することで薬局薬剤師は、診療内容を踏まえた服薬指導、有害事象の早期発見、検査データに基づく処方設計の提案や疑義照会が可能になる。患者の治療に対する意識や服薬コンプライアンスの向上、在宅におけるセルフメディケーションのサポートがより実践的に行えるようになる」と期待を語った。

このシステムを通じて、外来化学療法室での薬剤指導内容や、入院中の指導内容、調剤方法も閲覧できるため、シームレスな医療の実現に役立つとした。

■開示には医師の理解必要

中国中央病院薬剤部の原景子氏は、院外処方箋用紙への検査値表示を来年1月から開始すべく準備していると語った。院外処方箋用紙のサイズをA5からA4に変更。身長や体重、抗がん剤のプロトコル名、各種検査結果を右半分に表示するもの。

実施に向けて今年7月、院内の幹部会で提案したところ、「なぜ、どうしても必要なのか、福山の他の病院も実施しているのか」と医師からの強い反対があった。予想外の反応だった」と原氏は振り返った。

そこで、昨年10月から院外処方箋への検査値表示を開始した京都大学医学部附属病院の松原和夫薬剤部長を招き、院内のスタッフや薬局薬剤師を対象にその意義を説く講演会を実施。院長らの理解が深まったという。

現在は、医局会での報告を残すのみで院内での合意を得た段階。地域の薬剤師会も前向きな姿勢を見せている。今後は、薬局薬剤師を対象に、検査値の勉強会や症例検討会を実施する計画だ。

5月から院外処方箋への検査値表示を開始した岡山大学病院薬剤部の定金典明氏は、受け手側の薬局薬剤師の反応として「できれば疾患名も知りたいが、検査値でも参考になる」「処方鑑査時に肝機能、腎機能は必ずチェックしている」という前向きな意見があることを紹介した。

その一方で、「今のところ役立っているかどうかは不明」「役立った経験がほとんどない」との声も薬局薬剤師から聞かれると報告した。

また、検査値表示の有無を医師が選択できるため、表示実施率は10月上旬で44・7%にとどまっているとして、「意義を医師にもっと周知する必要がある」と課題を語った。

■高校生に無料開放

同学術大会は、「高校生オープン学会」と称して高校生に無料で開放された。同学術大会を通じて薬剤師や薬学の魅力を伝え、1人でも多くの高校生に将来、薬学部に進学してもらおうと企画したもの。

同学術大会での高校生向け企画は今年で4年目。薬剤師不足に悩む同地域の事情が色濃く反映されている。

9日には高校生向けプログラムが設けられ、4県6校の高校生が日頃の研究成果をポスターで発表した。「鳥類の性決定メカニズムの解明」「植物の抗菌活性についての研究」など計20題の発表があり、薬系大学教員や現場の薬剤師が高校生の説明に耳を傾けた。

また、会場の一角では薬学生対象企画「薬学生への現場からのメッセージ」と題して、同地域の5薬剤師会、8病院薬剤師会がブースを出展。薬剤師が働く医療現場の魅力を高校生にアピールした。(薬事日報)

[>> イベント・講演一覧に戻る](#)


小川氏



岸之上氏



原氏



定金氏